

I-109 癌術後、肝転移急速顕性化例の検討—原発

巣における血管新生因子 TdR Pase, VEGF の発現
日本医科大学第一外科¹⁾, 同千葉北総病院²⁾
白川 毅¹⁾, 恩田昌彦, 徳永 昭, 瀧田雅仁,
池田研吾, 平本義浩, 寺本 忠, 小栗 剛, 藤田逸郎,
水谷 崇, 木山輝郎, 吉行俊郎, 加藤俊二, 松倉則夫,
山下精彦²⁾

【目的】これまで悪性腫瘍術後または術後治療後早期に肝転移顕性化した例の原発巣における TGF- α , EGFR, C-erbB-2, TdR Pase の発現を検討した。結果 TdR Pase は全例で腫瘍細胞または間質に染色性を認めた。今回特に胃癌を中心とした原発巣における血管新生因子の発現に着目し、新たに VEGF も加えて検討した。【対象・方法】術直後肝転移顕性化した胃癌患者 5 例、いずれも術前には認めなかった肝転移が術後 6 月以内に顕性化。原発巣の TdR Pase (抗体: 日本ロシュより), VEGF, TGF- α , EGFR を免疫染色し、胃癌非肝転移例と比較、検討した。【結果】 TdR Pase および VEGF は胃癌術後肝転移急速顕性化例で非肝転移例よりも高率に染色性を認めた。また TdR Pase と VEGF の発現に相関を認めた。【考察】胃癌原発巣における TdR Pase と VEGF 発現の検索は、術後肝転移高危険度群の設定に有用であることが示唆された。

I-110 胃癌患者に於ける GST 遺伝子欠損の検討

船橋市立医療センター外科¹⁾, 筑波大学社会医学系²⁾
松田充宏¹⁾, 原田勝二²⁾, 渡辺義二¹⁾, 唐司則之¹⁾,
鍋谷圭宏¹⁾, 山崎将人¹⁾, 坪 尚武¹⁾, 河野世章¹⁾,
佐藤裕俊¹⁾

【緒言】 Glutathion-S-transferase (GST) は、解毒系酵素であり、発癌との関係でも注目されている。我々は、Polymerase chain reaction 法 (PCR 法) を用いて、胃癌のリスクファクターとしての GST M1 遺伝子の欠損頻度を検討した。【対象】胃癌患者 60 名を胃癌グループとし、健常者 107 名を対照とした。【方法】抹消血を検体とし、DNA をイソプロピルアルコール沈澱にて抽出した。PCR 法は他の GST M と同性的の少ない Intron 6 を sense 鎖プライマーとし、Extron 7 中の GST M1A と GST M1B を区別する点突然変異の塩基を antisense 鎖プライマーとした。PCR 増幅産物は、アガロース電気泳動法にて検出した。【結果】 GST M1 遺伝子ホモ接合型欠損頻度は、健常者が 52.4%、胃癌 58.3%、うち管状腺癌 66.7% で、健常者と管状腺癌患者との間に有意差を認めた。また、60 歳以下の胃癌患者での欠損頻度は 73.1% で、有意に高かった。【考察】欠損型は管状腺癌に関しハイリスク因子であり、胃癌の発症年齢を早める因子であることが推定された。

I-111 胃癌におけるデスモグレイン I および E-カドヘリンの発現の検討 (予後と perineural invasion との関連)

鹿児島大学第一外科 有留邦明 加藤健司 夏越祥次
帆北修一 貴島文雄 愛甲 孝

＜背景、目的＞ E-cadherin (以下 E-Cad.) を中心とした接着因子の発現および機能の低下は癌の転移の初期の一つの現象であり、多くの報告がなされてきた。今回、胃癌において、E-cad. に加えて、デスモグレイン I を構成する糖蛋白の一つである Desmoglein I (以下 DGI) の発現および低下の意義について免疫組織学的検討を加えた。＜対象＞ 10 年間に当科にて根治度 A の手術のなされた深達度 mp および ss の胃癌 51 例を対象とした。＜方法＞胃癌 51 例のパラフィン切片を用い、抗 E-Cad 抗体および抗 DGI 抗体を用い免疫組織染色を行なった。＜結果、考察＞ 1. DGI の発現は PNI の発現と有意 ($p < 0.01$) に正の相関を示した。2. E-Cad. は未分化、低分化型腺癌で、分化型腺癌よりも有意 ($p < 0.02$) に発現が減弱していたが、脈管侵襲、リンパ節転移や他の因子との関連は認められなかった。3. DGI の発現と予後との関連において検討を加えたところ、分化型腺癌において、DGI 陰性例の予後が陽性例の予後より有意 ($P < 0.05$) に悪かった。DGI は胃癌の予後に関連のある可能性が示唆された。

I-112 DNA ploidy および各種免疫染色所見よりみた胃癌の悪性度と核異型との関連性：島多勝夫、坂本 隆、斎藤文良、岸本浩史、笹原孝太郎、井原祐治、津沢豊一、榊原年宏、清水哲朗、田内克典、斎藤光和、藤巻雅夫

【目的】切除胃癌症例に対し、DNA ploidy, PCNA index (PI) および p-53, C-erbB-2, CEA 各種蛋白発現を検討し、悪性度評価並びに核異型度との関連性を行った。【対象と方法】早期胃癌 18 例 (A 群)、肝転移を伴う進行胃癌 (B 群) 41 例を対象とした。PCNA, C-erbB-2, p-53, CEA 免疫染色は切除標本の最大腫瘍断面のパラフィン包埋切片を用い、LSAB 法にて行った。DNA ploidy 測定は 50 μ の同切片を用い、顕微蛍光測定法にて行った。核異型度 (CG) は Black の分類に準じ、判定した。【結果】 A 群の PI は 0.44 ± 0.03 であり、B 群のそれは 0.66 ± 0.41 であった ($p < 0.01$)。PI の高値症例では Aneuploid が多かった ($p < 0.05$)。PI 高値例と Aneuploid 例では核異型の比較的強い CG-II, III の症例が多かった ($p < 0.001, p < 0.05$)。【結語】癌の進行に伴い、PI 高値例や Aneuploid 例が増加し、それと共に核異型度の程度は相関を示した。今後 cost benefit の面からみて細胞の核異型度判定は胃癌の悪性度評価に有用と思われた。